

ISSN 0285-9823

女子大國文

第百五十九号

平成二十八年九月発行

女子大國文 第百五十九号

平成二十八年九月発行

京都女子大学国文学会

彙報……………(三)

〔資料紹介〕
『婚姻献立帳』(明治廿六年)……………八木 意知男(二〇)

〔資料紹介〕京都女子大学図書館所蔵
東寺宝菩提院三密蔵旧蔵聖教群略解題I……………中前 正志(一)
—付: 平安後期写『梵本真言集』影印—

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百五十九号

平成二十八年九月十五日 印刷
平成二十八年九月三十日 発行

〒〇五八五〇 京都市東山区今熊野北日吉町三番地

編輯兼 京都女子大学国文学会
発行者

電話 〇五二五二一九〇七六

FAX 〇五二五二一九二二〇

振替 〇〇〇一五一三二四

〒〇五八八四 京都市上京区上長者町通黒門東入

印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇五二四一四一〇八代

FAX 〇五二四一六二八二

彙報

○春季公開講座出席者の感想文、優秀論文発表者の卒論要旨と卒論体験記、優秀論文発表会出席者の感想文、新人生歓迎行事の感想文など、盛りだくさんに掲載してあります。

研究室たより

○一九五一年より一九九一年に定年退職なされるまで長年にわたり本学に勤務されご尽力をいただいた、本学名誉教授の清水克彦先生が、本年二月十四日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。在りし日の清水先生を偲ぶ文章を、江富範子先生よりいただきました。

○本年三月末をもって、西崎亨先生が定年退職なされました。
二〇〇九年に前任校の武庫川女子大学より本学へご着任になられてより七年間、本学に多大なご尽力を賜りました。先生のご退職は、誠に残念ではありますが、先生のますますのご健勝をお祈り申し上げますとともに、今後とも京都女子大学国文学科をお見守り下さいますようお願い申し上げます。卒業生・在学生の皆さんより、西崎先生の思い出の記を

お寄せいただきました。

○替わって四月より、新任として、山中延之先生をお迎えいたしました。日本語史、抄物をご専門とされる山中先生より、ご就任の辞の玉稿をいただきました。

○昨年度一年間、龍谷大学において国内研修をされていた普賢保之先生が、この四月よりお戻りになりました。

○本年度の文学部国文学科主任兼国文学会代表幹事は滝川幸司先生で、江富範子・川島朋子両先生とともに、学科・国文学会の運営にあたっておられます。

二〇一六年度国文学会行事（前期）

○新入生オリエンテーション

四月五日（火）午後一時半より 於J224教室

○優秀論文発表会

五月十四日（土）午後一時より 於J420教室

〈卒業論文〉

・『太平記』における邯鄲譚

・太宰治「皮膚と心」論

・小川未明「港に着いた黒んぼ」論

原田沙季氏

小川真穂氏

— (良心) から成る童話 —

安田知世氏

・住吉大社と庶民信仰

— 特に近世の住吉信仰を中心に —

関藤雅子氏

〈修士論文〉

・尾崎紅葉作品の記号の使用法

伊達歩実氏

○春季公開講座 (大学と共催)

五月二十日 (金) 午後二時四十五分より 於 J420 教室

講題 ことば遊びの系譜 — 呪文の世界 —

講師 奈良女子大学名誉教授 遠藤邦基先生

○新人生歓迎行事 能楽鑑賞会

六月十八日 (土) 午後一時より

於音楽棟2階演奏ホール

着付・囃子に関する解説拝聴、小鼓・大鼓体験、狂言『寝

音曲』、能『橋弁慶』鑑賞

清水克彦先生を偲んで

江 富 範 子

平成二十八年二月十四日、清水克彦本学名誉教授が急逝された。二日後の十六日には九十歳の誕生日を迎えられるはずであった。その一月前に当たる一月十六日、清水先生の教え子を中心に二十一年近く続けられている万葉研究会の席でお目に掛かった折、次回、三月十六日の研究会に向けて「新田部皇子への献呈歌」(巻三、二六一〜二)で新見を発表したいとレジュメを準備、意欲に燃えた元気なお姿を拝見していただけに、亡くなられたことが未だ信じられない。

清水先生は本学で四十年の長きに亘って教鞭を執られ、平成三年三月に退職、爾来、四半世紀が経過した。学生はもとより、教職員の間でも在職中の先生を知る者はほとんどいなくなってしまう。在職中の最後の四年間を御一緒し、その後、研究会でお教えいただいた者として、先生のことを本誌読者に少し紹介しておきたい。

清水先生と言えば万葉学の泰斗として広く知られた方が、数多い業績の中でも、私が最も感銘を受けたのは柿本人麻呂についての御研究であった。御著者で言えば『柿本人麻呂——作品研究

——『昭和四十年』から晩年の『万葉論集——石見の人麻呂他——』（平成十七年）に至るまで、柿本人麻呂の作品を白鳳時代に生きた「ますらを」（立派な男子）の文学として読み解いた一連の御論考によって、私はようやく、人麻呂の長歌の魅力に目を開かれたのである。それらの御論考は、先生御自身の弁を借りると「僕はスタイリストだから」ということで煩雑さを嫌い、簡にして要を得た文章で綴られているせいか、一種の精神論と捉える誤解もなくはないが、御論考が文学の言葉としての精緻な把握を基盤に成り立っていることは、迂闊な読者でなければ気がつくはずである。これは先述の研究会に参加させていただいて知ったことであるが、和歌一首を解釈するにもおびただしい枚数のカードを取られ、それを繰り返し検討した上でノートにまとめ、一定の見解を得た際には、それらを全て惜しげもなく捨て去るのである。再度、同じ和歌を考察する場合でも、その都度、一から考え直したいとの思いからだそうである。しかも、そうした綿密な調査が、無味乾燥な訓話注釈に終止するのではなく、清水先生という一個人の人格を通した読みとなって呈示され、先生でなくてはなし得ない御論考となって結実する。その面目躍如たるものが人麻呂について御論考であろう。人麻呂の「ますらを」精神と先生の闊達な御気性とが響きあい、我々を魅了してやまないのである。

清水先生こそは大正生まれの「ますらを」であった。お若い頃の武勇談の数々を、年配の先生方からよく聞かされたものである。「宴席でお膳の上を走った」（これは後日、先生から直接、伺ったところ、高名な老先生のお膳をわざわざまたいで行き来したそう）とか、『立ち入り禁止』とある豊国廟前駐車場の柵が気に入らないと飛び越そうとして柵に当たって転んだ」（これも御本人の弁によれば、女坂からずっと上りであることを忘れ、目算を誤ったそうだ）とか。私が出会った頃の先生は六十歳を過ぎ、さすがにやんちゃぶりは影を潜めてはいたものの、「強きをくじき弱きを助ける」正義の味方、目下の者に対しては限りなく優しく、生意気盛りの当時の私にも実に寛容であった。

ただ、先生が私にどうしても許して下さらなかったことが一つあった。それは溜め息をつくことである。中年になって、公私ともに重荷に打ちひしがれた私に、度々、電話で近況をお尋ね下さるのであるが、私はできる限り愚痴っぽくならぬよう、事実を淡々と語ることを心掛けてはいたものの、最後について、「ああ」と溜め息が出る。すると先生は突如、厳しい声になって「溜め息ついて何になる。超克せねばならぬ」とおっしゃるのである。それは何度も何度も繰り返され、遂に、私は一人自室に居る時でも、溜め息が出そうになると、どこからともなく「溜め息ついて何に

なる」という先生の声が聞こえて来るようになった。いつしか、私は溜め息をつかなくなったのである。

溜め息ぐらいつかせて下さい。いや、今は、存分に嘆くことをお許し下さい。失われたものを歎き悲しむことがそれを賞讃することにつながるということを、人麻呂の「近江荒都歌」(巻一、二九〇三二)で教えて下さったのは先生なので。御業績は残るとしても、それを生み出された方の警咳に接することがかなわなくなってしまった今、ただただ嘆かれるばかりである。

西崎先生思い出の記

西崎先生思い出の記

二〇一一年度卒業 門 京 子

西崎亭先生、この度はご退任おめでとうございます。

わたしが西崎先生の講義を初めて受けましたのは、実は三回生の演習の時でした。まだ何を研究するか全く決まっていなかった二回生のわたしは、西崎先生のゼミでは日本語に関するのなら何でも研究できるという噂を聞きつけ、選んだことを記憶してお

ります。先生は、わたしのような学生もあたたかく迎えてくださり、いつも笑顔でご指導くださいました。

先生のご指導の中でとても印象に残っている言葉があります。それは、卒業論文に取り組みはじめる演習の段階で掛けてくださった「土の中からマンガまで。」という言葉です。どんなことを研究テーマにしたいか分からず不安を感じていたわたしは、国語学のゼミであるからいつの時代のどのような資料が対象になってもいいという言葉に、本当に励まされました。そのおかげで、三回生時の演習では、研究テーマを限定されることなく、様々な時代・資料を研究対象とした発表をしたり聞いたりすることが出来、研究とはとても楽しいものだと実感することができました。

また、西崎先生は毎週の演習の中で、必ず何かの問いかけをしてくださいました。その問いの答えとなりそうなことを自分なりに調べて、先生のお考えをうかがっていたことを思い出します。けれども、答えはこうだとご自身の意見を押しつけるようなことは決してなさいませんでした。例えば日常で使う言葉、「から」と「の」の印象の違いの話、歌謡曲の抑揚の付け方で言葉の意味が変わってしまう話…少し意識すれば研究の題材となるようなことがたくさんあることに気付かせていただきました。先生は

きつと、国語学に関する難しい課題であっても、日常の中で持つ疑問と同じような感覚で見つける姿勢、そしてその課題に自主的に積極的に取り組む姿勢を育んでくださっていたのだと思います。

わたしは最終的に夏目漱石の「道草」の自筆原稿による振り仮名の研究をしました。そのテーマ設定に至るまでの演習の中で、若者ことばについてや明治文学における漢語の使われ方について、自ら興味を持って取り組めたのは、先生の寛容なご指導のおかげです。国文学科に所属しながら教職を志していた私も、表記から作者の意図を考えるという卒業論文のテーマを通して、作品を読み解く一つの方法を学ばせていただきました。それは地道な作業でしたが、自ら探求することの大切さ、楽しさを知ることが出来ました。そしてその姿勢は、自己研鑽を要求される教職に就いた今も生きております。

また、指導者の姿勢として、生徒にとつて身近なことから疑問を見つけさせ、その疑問を勉強で解決できたら楽しいでしょうか？ というように、勉強することの楽しさを伝えられるよう工夫して授業をすることを心がけております。西崎先生は、わたしが卒業して五年経った今でも、年賀状を通じて励ましのお言葉をくださいます。一人一人の学生に、大切に丁寧に関わってくださる西崎

先生の指導者としての姿勢を、これからも見習っていきたくと思っております。

そのように国語学のことをいつも考え、指導者としての姿を見せてくださった西崎先生ですが、ゼミ旅行では、蟹三昧ではしゃぐ私たちをあたたく見守ってくださったことを思い出します。宿ではカラオケを注文してくださり、皆一曲ずつ歌ったのですが、先生が、石原裕次郎の「赤いハンカチ」を熱唱してくださいましたことは今でも忘れられません。また、いつも真摯な態度で研究に臨まれる先生が、卒業アルバムの写真撮影のときにも京都国立博物館にある「考える人」の像のまねをしてくださいました。このようなお茶目な一面もお持ちの先生は、多くの学生から慕われていらつしやいました。

わたしにとつて西崎ゼミで過ごさせていただいた時間はかけがえないものです。今後はくれぐれも健康に留意されて、お元気に過ごしてくださいませようお祈り申し上げます。先生にご指導賜りました二年間で、学ぶことの楽しさを知り、また、自分で真理を追究する姿勢が身につきました。本当にありがとうございます。

西崎先生と私

二〇二二年度卒業 北原 慈 子

三郎を「サンロウ」ではなく「サブロウ」と読むのはなぜか。「食わず嫌い」と「負けず嫌い」の「ず」は、それぞれ異なる意味を持つのではないか。船名「〇〇丸」の「丸」にはどのような意味があるのか。——これらはすべて、私が三回生のときに西崎先生から与えて頂いたゼミの課題である。三回生といえ、大半の学生が「卒業論文」という四文字に焦りを覚え始める頃だろう。私もその例に漏れず、あてもなく馬町のJ校舎を訪れては、焼けた本の背表紙を追って図書室内を徘徊したものである。そうしたなかであって、西崎先生のご指導は画期的だった。「難しく考えずに、日常生活を送るなかで出会う言葉に、“不思議”を見出せばいい」。ゼミの課題をこなすことにそう教えて頂き、やがて私のなかにあった焦燥感も消えた。そして徐々にではあるが、自身の疑問を探求する、ということに対して喜びを見出すようになったのである。

三回生の後期に入るころには、研究の方向性について毎週のようには西崎先生に相談させて頂いた。「論争」と「争論」のように、字順の反転する語の成り立ちや、意味、用法について総括的に考

察したいのですが、何から手を付ければいいのか、という、稚拙極まりない相談にも、西崎先生は逐一丁寧に助言してくださった。「まずは先行論文の分析から」と、一週間に一度のペースで様々な文献を紹介してくださったのである（先生には口が裂けても言えなかつたが、表紙の金箔が剥がれかけた分厚い書籍を笑顔でご紹介頂くと、これを一週間で読み込むのか」と、目まいがしそうだった）。だが、ご紹介頂いた多数の論考よりも、私が必要な影響をうけたのは、西崎先生のご自身の論考である。「読書」は「書ヲ読ム」か？—観智院本『類聚名義抄』所載の義注と連文—『女子大國文』第百四十九号掲載）であった。多くの辞書に記された注解や、和訓、義注を包括的に精査されるその手法を、私も四苦八苦しながら真似しようとしたものである。

このような実践的な論文指導のもと、四回生になる頃には、私は自身の疑問とそれに対する考察を、ようやく具体化することができるようになっていた。むしろその喜びはいささかならぬものであったが、それ以上に、物事に対して地道に、かつ誠実に取り組む姿勢を身に付けることができたのは大きな収穫であった。西崎先生のご指導をうけた誰もが感じたことだろうが、先生は常日頃から笑顔絶やさず、厳しいお顔をされることはほとんどない一方、研究に対して妥協を許さない方である。「一見無駄に思

えることでも労を惜しむな」と、コツコツと地道な研究方法を信条とされている。この姿勢は先生の「指導をうけた学生たちにも、自然と染みついていったことだろう。少なくとも私はそうだった。いま手許にある小豆色の表紙の付いた卒業論文には、様々な参考文献を列挙しているが、実は目を通してながらも活用できなかった論考はその数倍に達していた。この卒業論文は、大学院に進んでからさらに手を加えて活字として発表させて頂いたのだが、これも大学生だった当時に西崎先生の助言に従って作り上げた、大きな引出しがあったからこそ実現したのである。

西崎先生にご指導を賜ったのは、二年間という本当に短い期間だった。しかし、その間にうけた数々の教えは、私にとってかけがえのない財産となつている。今はもう、J校舎の研究室を訪れても西崎先生はいらっしゃらないし、パンと抹茶という不思議な組み合わせの昼食をとられる先生を前に、研究について相談させて頂くこともできない。そのことに、いささかの寂しさも覚えなといえれば嘘になるが、私のそうした私情とは関係なく、先生は今後もご自身の研究を深め、大きな成果を築きあげられていくことだろう。

——西崎先生。長年本当にお疲れさまでした。先生のご指導の

もと過ごした大学生活は、私にとって得難い時間でした。先生に教えて頂いたことを糧として、今後も精進してまいりたいと思います。

西崎先生の思い出

二〇一三年度卒業 奥田 智恵理

入学当初、言葉の美しさ、表現の面白さというものは文学の中でこそ発揮されるものと考えていたように思います。そのため、言葉の表現世界に携わっていたいと京都女子大学国文学科に入學した当時、まだ、国語学という分野を知らなかったこともありすが、最終的にはいずれかの国文学のゼミで学ぶのだと思っていました。

受験のための知識だけを詰め込んでやってきた学生だった私が先生に出会ったのは、たしか、講読国語学の講義だったと思います。先生が用意している、あるいは、講義の中でふと思いついて、学生に投げかける質問がいつも楽しみであり、少し苦手でもありました。今まで、知識として疑いなく受け止めてきたことについて、改めて向き合うことは新しい発見でもありましたが、これまで素通りしてきた「なぜ」の多さに、驚きと、自分の言葉に対する認識の鈍さを意識せざるを得なかったからです。

そのなかのひとつで、私が最も好きなものが、古典文法の格助詞で主格を示す「が」と「の」の違いについての話です。「が」と「の」の違いはどうかやってみるのか。こういった問いが、主格を示す格助詞は「が」と「の」がある、と教科書どおりに覚えてきた、私のような学生に不意に向けられるので、最初の頃は戸惑いました。その場で電子辞書や手持ちの古典文法の参考書を引いても答えが載っているような問いでないため、知らなければその場で考えなければなりません。先生は、何人かの学生に意見を述べさせて、いつも、ふんふんと面白そうに聞いてから、答え合わせをしたり、そのまま課題にしたりするのです。 「が」と「の」の違いについては、その場で、主語となる人物との関係によって使い分けるといふ答え合わせがありました。「が」は自分に近い人物が対象だった場合で、「の」は目上の人物が対象の時に使われるという解説が続いて、

「だから、『君が代』の『君』は君主を表しているのではなく、自分の身近な者、つまり恋人を指していて、『君が代』は恋人に千年も万年も生きてね、という恋の歌なんだよ。」

と、その話は締めくくられました。それは、私にとって、文学の中に留まらない、身近だからこそ大切にしたい言葉の美しき、表現の面白さに気付かされた瞬間でした。このとき西崎先生のゼミ

で卒論を書くことと決めたことを覚えています。たしかまだ、一回生前期の二回目か三回目くらいの講義のことでした。後にゼミの食事会で先生にこのことをお話したとき、先生は笑ってらっしゃいましたし、学生生活のなかで他にもさまざまな先生からたくさんこのことを学びましたが、根本的な気付きの瞬間だったこの時が、私の四年間の学生時代の講義の中で、一番鮮烈でした。

また、辞書の面白さを教えてくださったのも先生でした。数種類の辞書を引き、その出典元の文献を辿り、さらに別の辞書を引いて、それらを合わせたうえで、自分で答えを導かなければならないレポート課題に、丁校舎の図書館分館で、何冊もの辞書相手に格闘したのは一度や二度ではありませんでした。

「なぜ、という疑問を持ちなさい。」

という学期末の最後の講義で必ずおっしゃっていた言葉と同じくらい印象に残っているのが、

「辞書を引きなさい。それもひとつの辞書でなく、できるだけたくさんさんの辞書を引いて比べてみなさい。」

という言葉です。ひとつの辞書の内容だけで満足せず、必ず複数の辞書を比べるべきという当時の教えが染みついたのか、細々と国語辞典を集めるのが趣味のようになり、目標は『日本国語大辞典 第二版』を揃えることになっています。

そして、西崎先生の思い出というタイトルになぞって、「敵に塩を送る」ならぬ、「恩師に塩を贈った」、私たちの代のゼミの話をしなければなりません。私たちの代の西崎ゼミ生はなかなかタイミングが合わず、最初で最後の食事が、卒業式前夜によく行われました。普通の個室の居酒屋が会場となりましたが、出て来たポテトフライが薄味で店員さんに塩を持ってきてもらい、料理と飲み物、そして塩の瓶が並ぶテーブルを囲んで、和やかに談笑していた最中、先生がおもむろに塩の瓶を手にとり、反対の掌に数回ポンポンと中身を出して、そのまま口に放り込んだので、私を含むゼミ生が一斉に止めたのでした。後にも先にも、先生に對して、それはだめです、よくないです、と口にしたのは、唯一あの時だけです。ご自宅では、冷蔵庫の野菜をタジン鍋で蒸して塩だけで召しあがっているという話は聞いたことがあり、他の何人かのゼミ生も知っていました。直接塩を口に放り込むのは予想外で少し場が騒然としました。先生は、「心配せんでも血圧の数値なんかは正常だから。」と、実際のとても健康的な数値を笑いながら仰るので、私たちも、先生が健康で好きな良いか、と妙に納得してしまい、そしてそれは、無計画にも卒業式前日まで、内容が決まっていなかったゼミ生から恩師へのプレゼントが決まった瞬間でもありました。野菜に合いそうな塩を数種類、そ

れぞれ産地や色や粒の大きさなどが異なるものと、これも先生がお好きな甘いお菓子を詰め合わせたものを贈り、私たちは満足していたのですが、全て終わってからは、「恩師に塩を贈った」ことに気が付き、頭を抱えたのでした。先生がそんな意地の悪い解釈をされるとは思いませんでした。「敵に塩を送る」ということわざを踏まえて、私たちが恩師を敵と解釈したと取られてもおかしくない状況に、卒業後、一度母校に遊びに行った際は、まず、その点を弁解することになりました。教え子たちの最後のミスも、笑ってくださったのが救いでした。

縁あって、毎年前後期とも欠かさず講義やゼミでお世話になり、長期休暇期間以外は、四年間ほぼ週に一回以上、先生の講義を受けていました。学生時代それだけの頻度でお会いしていた先生は他にいらつしやらなかった気がします。だからこそ、もう母校に先生がいらつしやらないと思うと寂しい気持ちではあります。一回生初期にして先生のゼミ生として卒業することを決めていたわたしとしては、それが叶ったことが自慢でもあります。

先生がご退職される前に、当時の一部のゼミ生が集まって開いたプチ同窓会のようなお茶会で、

「退職したら時間もできるし、花が好きだから、家の畑の片隅に花でも植えようか。」

とおっしゃっていたお花を、いつかゼミの友人たちを誘って見に行きたいと思います。

西崎先生、長い教師生活本当にお疲れさまでした。先生の教え子の一人となれて本当に幸運でした。ありがとうございます。塩はほどほどに、どうぞ健康にはお気を付けてください。

西崎先生思い出の記

二〇一五年度卒業 望 月 春 香
平成二八年三月一五日、長いようであつたという間であつた大学生活に終止符を打ちました。卒業式やその後の謝恩会を終え、四年間で最も多くの時間をかけて学んだことは何か、また最もお世話になった方はどなただろうか、と考えてみました。その答えは考えることに時間を費やさず、すぐに導くことができました。前者の答えは国語学、そして後者の答えは、西崎先生です。そこで、国語学を専門にされている西崎先生との思い出を振り返っていきたいと思います。

私が西崎先生と初めてお会いしたのは、遡ること今から四年前の二〇一二年四月のことです。一回生の前期、後期で受講する入門演習を担当してくださったのが西崎先生でした。高校時代から苦手としていた文法の教本を片手に、緊張しながら初めての少人

数制の授業に参加していたことを思い出します。そのような緊張感の中で、文法に対する考え方や意識が変わり、高校時代は単に覚えることばかりに焦っていたのに対し、楽しさをも感じるようになったのは、西崎先生の御講義からの学びがあつてこそのものであつたと思います。

一回生として過ごした一年が終わり、二回生でも西崎先生の基礎演習を受講しました。この時から国語学について学び始め、三回生の演習Ⅰ、四回生の演習Ⅱでも先生の御講義を選択しました。時には周りからの助言をもとに分野や先生を変更して受講してみようかと考えたこともありましたが、道のりを変えることなく四年間ずっと西崎先生の御講義を受講してきました。特に三回生の後期からは、四回生では西崎先生のご指導のもと、必ず国語学の分野で卒業論文を執筆したいと強く考えており、迷うことなく西崎ゼミを選択したことは現在でもはっきりと覚えています。

振り返ってみるとこのように四年間受講し続けたい、と思うほど私にとって西崎先生の御講義は魅力的であり、興味・関心の湧く時間でもありました。中でも先生の御講義は、その日のテーマとなる話題以外に知っていると便利なことや、国語学に関する豆知識を多くご指導くださいました。私はこの時間が非常に楽しみであり、全てノートに書いていくことで国語学への関心が高まっ

た部分も大いにあります。例えば、同じ日本国内であっても関東と関西では、「くさせていただきます。」という丁寧な表現に対する捉え方に相違がみられる、というお話が印象に残っています。私も普段から頻繁に用いていた表現であったため、このように場所によって言い方ひとつで相手の受け取り方も異なってくることを先生から伺い、衝撃を受けました。同時に、日本語は奥が深く、難しいものであると改めて感じたものです。こうした西崎先生からのお話を御講義中に聴くことで、論文を解析したり、一つの題材に絞って調査をするだけでは得ることのできない、私たちの日常に潜んでいる国語学あるといったような知識を身につけることができました。このような先生のご指導があったからこそ、国語学という分野の研究に興味を持ち、のめり込んでいったのだと思います。

そして卒業論文執筆に挑んだ西崎ゼミ生としての一年間。就職活動の時期がこれまでもよりも遅くなり、論文執筆のための研究の時間と就職活動の時間が重なってしまい、ゼミ生皆が焦っていた時も、西崎先生はゼミの時間に優しく出迎えてくださいました。そして一言、「頑張ってください。良い報告を待っています。」と先生からのお言葉に非常に強く背中を押されたと同時に、心から西崎ゼミに入ることができてよかったと感じた瞬間でもありません。

た。卒業論文を執筆する際も、優しく、温かく、時に厳しくご指導をさせていただきました。また、質問のため先生の研究室へ伺うと親切丁寧に時間をかけてご指導くださり、四年間の集大成としてふさわしい卒業論文を手元に残すことができたと思っています。私にとって西崎ゼミ生として過ごした一年間は、先生のお人柄やゼミ内の居心地の良さに支えられ、全力で妥協することなく論文執筆に取り組むことができた、忘れられない一年です。論文執筆も終盤に差し掛かったところで、西崎先生がこの三月をもってご退任されることを伺いました。正直、非常に寂しさを覚えました。寂しさと驚きが大きいのしかかりましたが、西崎ゼミ最後の卒業生としてゼミ生全員で西崎先生と一緒に大学を卒業しよう、という共通目標を皆で掲げ、ラストスパートをかけて挑みました。このように先生とともに西崎ゼミ生として全力で駆け抜けた一年を送りました。卒業アルバムに載せる写真撮影の時の、皆で楽しく笑顔で決めポーズをしたことは忘れず、大切な思い出として心の中にしまっておきます。

大学生活四年間において、西崎先生には数えきれないほどの御指導を頂き、大変お世話になりました。多くのことを学び、知り、覚えることができた非常に貴重な四年間でした。この四年間で先生から学んだことは、今後の知識、財産として活かしていきます。

改めて、この場を借りて御礼申し上げます。

西崎先生、四年間本当にありがとうございました。感謝しても
しきれません。

お身体に気を付けてお過ごしください。

また、西崎先生と西崎ゼミ生の皆で笑顔で再会できる日を楽し
みにしています！

「鏡の中」の自分

大学院前期二回生 黒 星 淑 子

「鏡に映っている貴方と、鏡を見ている貴方。どちらが本当の
貴方なのか？」これは、入学式の日、西崎先生から出された宿
題である。

平成二十六年、私は社会人入学生として、場違いな己の姿に恐
縮しつつも緊張の中にあっただが、入学式後は国文研究室において先
生方のお話があったのだが、その最後の御言葉の中で西崎先生
が出されたのが前述の質問である。西崎先生は、私が専攻として
希望する国語学の教授。その先生からの思いがけなくも哲学的な
質問に戸惑い、「果たしてこのような難しい事をお話しになる先
生に、私のような者がついて行けるのだろうか。」という、大き
な不安を覚えた事を鮮明に覚えている。

ところが四月になり、実際の授業が開始されると、それまでの
大きな不安は嘘のように払拭された。西崎先生の授業は、常に明
確な証拠を求められるもので、その為の綿密で厳しい調査と検証
を必要とした。ゆえに演習準備は、古辞書との悪戦苦闘の日々と
なる。しかし演習や授業で話される先生はとても優しく、お話
しは生徒の人格とその専攻学問をも尊重された上でのユーモアを
交えた穏やかなものであった。たとえ生徒が不明として残した問
題があっても、先生ご自身から答えを出されることは皆無に等し
く、生徒自らが正解に辿り着けるように導かれる、という姿勢に
貫かれていた。生徒の不足部分に対して責められることなく、
授業は常に和やかな雰囲気にも包まれたものであった。

それはまた、学部生の授業においても同じであったように思う。
学部生は楽しく伸び伸びと受講し、先生の講義に引き込まれてい
るのが明らかであった。私がTAとして参加させて頂いたのは、
一年目が文法、二年目が卒論指導、という内容であったが、いず
れも学生の、伸びやか且つ真剣に取り組む態度が印象的であった。
それはまさしく、西崎先生の授業構成と話術の巧みさが生み出し
た賜物だと思われる。文法の授業においては、問題点への切込み
を、現代若者の頻用する語例や文例におき、次第に根本的な問題
点に入り込んで行く。問題点は常に学生の身近な用例から出され

るものゆえ、内省に基づきつつも、その先にある文法の問題を自身の問題として考える事が可能になったようである。また卒論指導の授業においては、生徒各自の研究結果がどのようにしたらより良い方向に向くか、その為にはどのような方法があるかを、生徒自身が考えることを中心に指導されていた。

これらの授業を通して驚かされたのは、先生の知識の豊富さである。それは分野を問わず多岐に渡るものであり、如何に些細な問題であっても、また如何なる分野の質問であっても、適切な対処法に導いて下さるのである。紹介下さる数々の本に対して、「ご自身では「僕はつまらない事ばかりに興味を持つから、あかんのやな。」と言われる。しかしそれは、所謂「つまらない事」ではなく、どんなに小さな問題でも見逃す事なく綿密に調査する、という姿勢に通じる事を教えて下さっていたように思う。しかも、お話をさせて頂く度に「この本は読んだかな？」と、次々と新刊本を示される。このことからしても、日頃の読書量の多さは想像し得る。もしかしたら、それ以上かもしれない。昼休みでも相談希望の学生で出入りが絶えない西崎先生の研究室。昼食もそこそこに対応されていた。その多忙な中で、一体どのようにしてあの読書量をこなされるのか、私には未だに疑問である。

また学生人気という点では、院生だけでなく、多くの学部生に

も慕われておいでであった。学部最後の授業において、「本当に、これが最後の授業になるんですか？もつと先生の授業を受けたいんですけど、その為にはどうしたら良いんですか？」という質問が、何人もの生徒から出されていた。それが全てを物語っていると言えるであろう。

このように、多くの生徒から慕われておられた先生であるが、ご自身の事については常に謙虚で控えられていた。研究室の会などにおいて、先生のご都合などをお伺いすると「私はいいから。他の先生方と院生を中心に考えて。」として、ご自身のスケジュールや都合などを主張されることはなかったと記憶している。それは、ご自身のご退官についても同じであって、四カ月前になって初めてその事を知らされた私は、非常な衝撃を受けた。その様子からであろうか、「もつと早くに教えてあげればよかったかな。」と、笑いながら話された先生であった。この時ばかりは、本当に驚かされた。

私のような智慧も能力も不足している学生に対しても、他の生徒と等しくご指導下さった西崎先生。それは大きな力として、なお私の支えとなっている宝物である。先生にご指導頂けた事がいかに有り難いものであったことか。今更ながらそれを痛感し、感謝せずにはいられない。しかしながら、おのれを振り返ってみる

と、未だに「鏡の中の自分」と「鏡を見ている自分」とのいずれが本当の自分であるか、その答えも見出せていない現状にいる。果たしてその時が訪れるか否か、さえも分からないのである。もしかししたら、先生のご指導を自分のものに出来た時こそが、その時なのかもしれない。

これまで、学問に対して綿密に厳しく対峙して来られた御姿を拝見し、自らの姿勢の甘さを痛感してきた。今はただ、今後ますますのご活躍であろう先生の御背中を、更に追い続けて行きたいと切望するのみである。

山中先生の就任の辞

「挨拶

山中 延之

今年度より、国語学担当の講師として赴任いたしました山中でございます。これまでは、主に京都女子大学のふもとに縁があったのですが、八年前から次第に坂を登ることが増え、このたび専任としてお世話になることになりました。と申しますのも、東山七条の京都国立博物館に隣接して豊国神社があり、その西に耳塚があります、その耳塚の向かいの専定寺（通称「烏寺」）がわ

が家の菩提寺であるからです。物心つきましてからも烏寺や京博・智積院へはたびたび足を運びましたが、その折に東山七条の交差点の「京都女子学園」の看板を見ては恐れとも神秘ともつかない感情を抱き、女坂を登ることはありませんでした。初めて登りましたのは二〇〇八年のことです。

大学院に入って「抄物」を読み始め、室町時代の日本語史料として言い残されていることはないかと考えはじめました。抄物は、漢文を講釈したもので、口語・文語を取り混ぜた文体に特色があります。その中でも『周易抄』を探ってみようと思い、あちこちの所蔵機関を訪ねました。京都女子大学の吉澤文庫に所蔵があるということを知り、閲覧申請をして、丁校舎一階の図書館分館で拝見しました。マイクロフィルムの複写もさせていただきました。これが京女にうかがった最初です。

その後、二〇一〇年に短国の非常勤講師としてお世話になることになりました。「国語学概説」を担当いたしました。私にとつて初めての大学での授業でした。いつも直前まで準備をしていて、大学へ向かうバスでも原稿を書き直していました。評価に際しては加減がわからず、期末試験と期末レポートの両方を課すという暴挙に出してみました。その後そのような過酷な試験を課したことがないの言うまでもありません。しかし、多少の苦情を聞

優秀論文発表会（五月十四日）

『太平記』における邯鄲譚

原 田 沙 季

いた記憶はありますが、学生は手を抜かずに取り組んでくれました。授業も静かに聞いてくれ、毎回の感想・質問もたくさん書いてくれました。今も研究室に保存しています。京女がやりやすかったこともあり、その後の大学非常勤講師では苦戦することもありました。短大の学生募集停止があり、私の担当は二〇一二年三月まででした。

その後、ご縁をいただき、ふたたび京女で教壇に立つことになりました。五、六年経てば顔見知りの学生は誰もいないはずですので、気分を一新して授業に臨もうと思っていたのですが、今春、赴任してから研修や親睦の機会があり、その中に一名、私の授業に出席していた元学生がいました。京女の新任職員だということです。京都市内には卒業生も多く、大学へもときどき遊びに来ると聞きました。

このようなご縁をありがたく思いますとともに、身の引き締まる思いでおります。まずは授業を通じて研究を進め、学科運営の邪魔にならないよう努めてまいりたいと存じます。専門は日本語の歴史です。先ほどの『周易抄』からやや興味が広がり、十五世紀の禅僧・桃源瑞仙の著した抄物を読んでいます。今年度の演習では、その『史記抄』を講読しています。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

唐代伝奇『枕中記』は、中唐の沈既済の作品である。才能はあるが官位を得られず貧しい生活を送る青年盧生が、邯鄲の旅籠で出会った道士に枕を借りて寝ると、出世と挫折を繰り返す波乱万丈な夢を見た。夢の中の自分が老いて死んだ所で目が覚めた盧生が見ると、寝る前に旅籠の主が蒸そうとしていた黍がまだ炊き上がっていないかった。この話は日本文学にも影響を与え、邯鄲譚を用いた作品が作られた。しかし、日本文学における邯鄲譚は、原拠である『枕中記』とは異なった内容となっている。卒業論文では、『太平記』に用いられた邯鄲譚が、なぜ『枕中記』とは異なった内容となっているのか、両作品および邯鄲譚が用いられる他作品との比較を通して検討した。

第一章では『枕中記』と『太平記』の比較を行った。『太平記』巻二五では、安徳天皇と共に壇の浦に沈んだ三種の神器の一つである宝剣が伊勢で発見される。その宝剣を巡る話の中で、「黄梁午炊の夢の話」という邯鄲譚が用いられている。

『枕中記』と『太平記』の邯鄲譚を比較してみると、青年盧生が、

道士に借りた枕で眠り一睡の間に長い人生を送る夢を見る、という大まかな流れは共通していた。しかし、内容には大きな違いがあった。たとえば夢の中で『枕中記』の盧生は、出世と挫折を繰り返す波乱万丈で複雑な人生を送り、自分の死で目が覚める。一方『太平記』の盧生は、挫折のない人生を送り、夫人と息子の入水に慌て騒ぐ周りの声で目が覚める。このような違いについて大矢根文次郎氏は、『枕中記』を日本的に書き改めたものだと指摘している。

しかし、内容が異なる理由はそれだけでなく、安徳天皇と結びつきの強い巻二五の中で用いるためではないかと考えた。巻二五で争点となっている宝剣は、天照大神の命で竜宮から届けられたとされている。これは、安徳天皇が龍神・龍女の生まれ変わりだという説があり、それを用いたのではないか。龍神の生まれ変わり説は『平家物語』巻一「剣」に、八岐大蛇が八つの頭と八つの尾を表す印として、八歳の安徳天皇となり宝剣を取り戻したとある。龍女の生まれ変わり説は『愚管抄』巻五に、龍女を祀る厳島神社に月詣した結果生まれた安徳天皇が、龍女の生まれ変わりだとある。また、『妙法蓮華経』第二二「提婆達多品」には、龍女が一瞬で男に生まれ変わり八歳で成仏したことが記されている。八歳という年齢が安徳天皇の入水した年齢と合致し、龍女の

生まれ変わり説が世に広まっていたとされる。

第二章では、『和漢朗詠集』古注釈書の比較を行った。『太平記』の邯鄲譚と同系統の話が『和漢朗詠集』の古注釈書『和漢朗詠集和談鈔』にあることを伊藤正義氏が指摘している。『和漢朗詠集』仙家「壺中天地乾坤外、夢裏身名旦暮間」の下の句に施された注である。この邯鄲譚は、『太平記』の邯鄲譚に比べ簡略な内容になっているが、夢の流れは『太平記』と同じであった。

また、古注釈書は『和談鈔』以外にもあるが、邯鄲譚を用いていたのは『和談鈔』だけであった。『和談鈔』は古注釈書の中で最も新しいと考えられ、現代の注釈書でも邯鄲譚が用いられていることから、他の古注釈書成立から『和談鈔』成立までの間に邯鄲譚を「夢裏身名旦暮間」の題材だと認識するようになったのではないか。その期間は『太平記』が成立したと推定される一三七〇年代であり、『和談鈔』は『太平記』の邯鄲譚を簡略化して用いたのだろう。しかし、その段階では邯鄲譚が「夢裏身名旦暮間」の題材として定着せず、『和談鈔』以降の江戸・明治・大正の注釈書でも邯鄲譚は用いられていない。どの時期から題材が邯鄲譚になったか定かではないが、『太平記』の邯鄲譚が何らかの関係はしているのではないかと考えた。

第三章では、謡曲『邯鄲』を取り上げた。この邯鄲譚は、挫折

の無い人生を送るなど『太平記』にどちらかといえば近い内容となっている。先行研究では『邯鄲』は『太平記』を用いて作られたとしているが、『太平記』を用いて作られたと切り切つてよいのだろうか。前述したように『太平記』と同系統の話が『和漢朗詠集和談鈔』にあり、散逸作品に『太平記』系統の話があった可能性もある。出典を明言するのは難しいが『太平記』系統の邯鄲譚をベースとして能向きの邯鄲譚を作り上げたのだろう。

結論として、『太平記』の邯鄲譚が、なぜ『枕中記』と異なる内容になっているのか。それは、安徳天皇と強く結びついている巻二五の中で、安徳天皇を思い起こさせる内容の邯鄲譚を用いるためである。巻二五では、伊勢で発見された宝剣を巡る話が展開される。その宝剣は壇の浦で安徳天皇と共に沈んだものだ。この時点では、巻二五と安徳天皇は宝剣を介した間接的な結びつきしかない。そこに、宝剣が竜宮から届けられたという設定が加わる。安徳天皇の龍神・龍女の生まれ変わり説から作られたと考えられるこの設定により、安徳天皇と巻二五には直接的な結びつきが生じた。間接的・直接的に安徳天皇と結びついた巻二五の中で邯鄲譚を用いるため、夫人と息子の入水という安徳天皇を思い起こさせる内容の邯鄲譚を作り上げた。『太平記』の新しい邯鄲譚は、日本文学における邯鄲譚の形の一つとして広まり、作品に合わせ

変化し用いられている。

論文執筆に関して私が伝えたいことは、とにかく資料を沢山集めて読むことです。執筆しながら資料を集めるのは大変ですし、他の大学図書館等から取り寄せとなると時間がかかるので、特に資料集めに関しては早めに行動してください。また、色々な分野の授業を受けてみてください。専門分野外の授業で、思いがけず卒論に使えるネタが見つかることもあります。

就活と重なり忙しくなったり、考察が行き詰まったり、卒論を書き終えることが出来るのか不安になる事もあるかと思いますが、しかし、卒論に取り組む時間は、自分の好きな事、興味ある事と、とことん向き合うことの出来る貴重な時間です。ぜひ楽しんで、満足のいく卒業論文を完成させてください。

太宰治「皮膚と心」論

小川 真穂

〈論提要〉

太宰治の「皮膚と心」は昭和十四年に発表された作品です。発表当時の評価は高く、特に女性独白体（女語り）の手法が注目されました。現在の研究においても、〈女語り〉や、太宰の女性観

といったテーマと共に論じられることが多いです。しかし、この状況では「皮膚と心」特有の問題点も全て〈女語り〉の特徴として収斂してしまう危険性があります。その為、本稿では先行研究にはない「皮膚と心」の新しい見解を示すことを目標に、副論文で「皮膚と心」と〈女語り〉を共に論じている先行研究を取り上げ、その研究の指摘が適切であるのかを検証し、そこで浮かび上がった疑問点をもとに本論で作品について考察を進めました。

副論文の第一章では、〈文体〉についての先行研究を取り上げました。研究では、〈女語り〉には特有のリズムや、泣き言めいた口調といった特徴があると論じられていました。しかし、太宰の同時代作品と比較すると、それらは〈女語り〉以外の作品にも見られる傾向であったり、または〈女語り〉であっても泣き言めいた口調を感じさせない作品もあり、先行研究で論じられていた説は、〈女語り〉だけの特徴と言えないことが判明しました。

第二章では、〈背景〉についての先行研究を取り上げました。研究では、太宰は〈女語り〉を用いて、戦争中に抑圧された感覚や風俗、生活様式などの表層の美意識を探り続けたと論じられていました。太宰の他の〈女語り〉の作品には、そういった表層の美意識を否定し、清貧の大切さを訴える作品があり、先行研究と矛盾していることが分かりました。以上のことより、〈女語り〉

の特徴とされてきたものは、他の一人称の作品にも見られる特徴であったり、或いは〈女語り〉の作品であっても、その特徴と一致しないことがある為、〈女語り〉とは、などと一括りに論じるべきではないという事が判明しました。また、これらを検証していく中で〈女性⇨弱者〉といった前提の研究が多いことを発見しました。しかし、その根拠は示されておらず、「皮膚と心」の「私」にも該当することであるのか疑問に感じただため本論で検討してきました。

本論の第一章では、〈女性⇨弱者〉といった説を検証する為、「私」の言動と実際の行動を照らし合わせ考察を進めました。作品内で、「私」は自身のことを「弱い」と表現していますが、「私」の実際の行動からは「弱い」印象を受けず、〈女性⇨弱者〉といった研究は「皮膚と心」の「私」には一致しない事が分かりました。またこのことから、「私」は事実と矛盾した語りをする傾向があるということを見ました。第二章では、夫の人物像について考察しました。すると、夫は当時の理想的な夫像に近い一方、太宰の描く典型的なパターン的人物（弱さ故に困難に遭う人物）とも重なっていることが分かりました。第三章では、皮膚病について取り上げました。先行研究では、「私」は理想的な夫婦関係を構築する為、皮膚病を利用して夫をたたせるということが論じられて

いました。本稿では、皮膚病にかかる前のかかった後の「私」の

行動を比較し、皮膚病には「私」の特徴である矛盾した語りに変化を与え、本音を引き出す役割があるといったことを指摘しました。第四章では、作品内で「私」が女について定義していく（女論）について取り上げました。先行研究で（女論）は離婚を避ける為に必要なであったと指摘されています。しかし、第一章で見た通り、「私」の語りは矛盾を含む傾向がある為、（女論）の言葉にも矛盾がないか、それまでの「私」の生き方と比べて検証しました。すると、ここでも事実と乖離した「私」の語りが見られました。また、先行研究の中で「私」が（女論）を無効化しているとの指摘がありますが、その理由については述べられていない為、「私」と周囲の人物とのやり取りを検証してその理由について考察しました。すると、周りの人物が「私」を理解していない事を突き止め、無効化の理由について、自らを苦しみから救う為に、苦悩の原因である（本質＝自分自身）を破壊することが必要だったのではないかといった結論にたどり着きました。

〈工夫したこと〉工夫と言えないかもしれませんが、作品の読み方に気をつけていました。特に時代背景を考慮することを意識していました。そして読み方自体も、最初から通して読む以外に、人物の会話のところだけを取り上げて読解する、登場人物の想い

を想像しながら読むなどしました。

なぜ読解に力を入れたかという点、私は勘違いや読み間違いをすることが多々あり、作品をたくさん読み込まないと正しく理解できないタイプだと自覚しているからです。ネガティブな表現だと思われるかもしれませんが、一く三回生のゼミで気づいた自身の性質です。それぞれ得意不得意があると思いますので、自らの苦手とする分野を知れば、工夫すべき点が見えてくると考えられます。

〈苦労したこと〉就職活動と並行して卒論を書くことが大変でした。特に就職活動初期はエントリーシートの定型文が決まっていなかったこともあり、エントリーシートに日々時間がかかり卒論を進めることができなかつたです。また、進路が決まるまでは精神的にしんどく、モヤモヤした想いを持ちながら過ごしていました。就職活動が終わる時期は人それぞれなのでアドバイスは出来ませんが、今言えることは就職活動が早く終わったからといって卒業論文にしっかりと向き合える訳ではないということです。焦らずもつと自分のペースで進めればよかつたかと振り返ります。

〈印象に残っていること〉二〇一五年度卒業論文と書いて提出するところを二〇一六年度卒業論文と提出してしまいました。今まで頑張ったことが水の泡になったようで、本当にショックでした。

おそらくエントリーシーットの書きすぎで二〇一六年度と書いてしまったと思われまふ。最後まで気を抜いてはいけないと痛感しました。

小川未明「港に着いた黒んぼ」論

—〈良心〉から成る童話—

安田知世

小川未明は、明治三十七年に初めて小説を発表した頃から、ロマンチズム、または新ロマンチズムの作家だと認識されてきた。しかし、大正初期頃から大杉栄など社会主義者との出会いによって、社会主義思想に近づいていく。今回扱った「港に着いた黒んぼ」(『童話 第二卷六月号』(大正一〇年六月一日 コドモ社))は大正十年に執筆された作品である。よって、この作品は未明の新ロマンチズムの思想と社会主義思想が融合されているのではないかと判断した。本論文では、社会主義的立場と新ロマンチズムの立場から作品を考察していると共に、未明の子供観、童話観などとの関連も含めて、「港に着いた黒んぼ」論を展開している。

まず、未明の創作意欲を駆り立てるものは、貧しい人々を救うために、不正の社会へ反抗を示すのだ、という強い信念であると

言える。これは、未明が子どもの頃から社会で生きる人々の貧富の差を目の当たりにしてきたからであった。そして、未明は不正の社会を正すためには、人間が〈良心〉を持つことを重視しており、人間の内面を変えることが社会の変革につながると考えていた。そして、社会主義思想やクロボトキンの相互扶助の精神、新ロマンチズムの思想は、〈良心〉に通じると考えており、社会の変革はこれをもって行われようとするものである。そして、未明が童話を書くのは、子供が〈良心〉を持つ者であると捉えており、〈良心〉を持った子供に〈良心〉から成る童話を読ませることで、人間の善と悪を判断できる大人に育て、よりよい社会にしていくのが未明の考えであった。

「港に着いた黒んぼ」では、まさに、弱者である姉弟と強者である大尽の関係を描くことで、当時の資本主義社会に通じるものがあった。しかし、南の島は姉にとって平等で、平和な〈理想〉郷であり、ここに未明の社会主義の思想が表れていると言える。一方で、未明は大人には、〈良心〉を持つ者と持たない者がいると捉えていた。本作品では、姉は、はじめ子供として描かれていたが、大尽と関わりを持ったことで、大人へと変化をする場面がある。その変化は、姉が大尽の許から戻って来た時に、今までは見えなかった月見草が見られるようになったことによって示され

ているのである。そして未明の他作品である「つばきの下のすみれ」(『小学少女 第四年第四号』大正一一年四月一日 研究社)から、月見草は虐げられたものを表す役割をしていることを明らかにした。ここから、姉は大人になっても、虐げられた存在に目を向けることができる(良心)を有する者として未明は描いていると考えられる。

そして、「幻夢の世界」が表現されている部分として、姉が弟のいる南の島へ行きたいと願いながらも、行くことが出来ない、という南の島への憧憬が挙げられる。未明は、人間とは、憧憬によつて辛い生活にも耐えることができるのだと述べていることから、憧憬することは、悲惨な立場にいる人間に対する、一種の救いの要素を持ち合わせていると考えられる。ここから、姉は弟に会うことはできないという悲痛な姿を見せているが、姉に、南の島への憧憬を残すことで救いを示していると考えられる。

先行研究において、木村小夜氏は、「見る」「見える」ことは終始マイナス性を帯びたものとして描かれる」(小川未明「赤い蠟燭と人魚」とその周辺」『福井県立大学論集第二十九号』(平成一九年七月三一日 公立大学法人福井県立大学)と述べ、「姉が大尽のもとから戻ってきた時」に大尽から「得た」「寶石」が「着物の襟に」付いていることを指摘している。だが、姉が、月見草

が見えるようになった意味については全く触れていない。そして、姉は大人になっても、「月見草」が見られるようになり(良心)を有する者として未明は描いていることから、姉が「見える」ようになったことをマイナスだとするのは賛成できない。

また、木村氏は、姉の「見られる側」から「見る側」への変化を、弟には二度と会えないという「マイナス」なこととして捉えている。しかし、未明が姉に南の島への憧憬を残すことで救いを示していることから、木村氏のいう、弟に会えないことが、マイナスという判断には賛成しがたいと判断できる。

また、悲しみの中に憧憬を見出すのは、同じ童話作家の北村寿夫と比較すると、未明特有のものであると言える。

この度は、つたないながら、私の論文執筆の体験記を書かせていただきます。京女に在学中は、まさか自分の文章が『女子大國文』に掲載されるとは思ってもみなかったので光栄に思います。

卒論執筆の道のりで、何が一番大変だったかと言うと(自分との戦い)です。四回生になると、卒論とともにこなさねばならないのは、就活だと思えます。私の場合、教員採用試験が夏に迫っており、試験の勉強や面接の練習で忙しい日々を過ごしていました。それでもなんとか、前期にはゼミで計三回の発表を終えまし

た。

夏の教員採用試験もあつという間に終わり、後期は卒論に専念できるといふ状態でした。きつと、計画的にきつちりとできる人なら、卒論執筆のペースを落とすはずがないと思います。しかし、前期である程度進めることができたと勘違いしていた私は、後期の一回目の発表で以前と内容があまり進んでいなかったため、峯村先生のお言葉を聞き、大いに反省する結果になりました。そこからは、これほど集中して勉強したことがないというぐらい必死に卒論を進めました。あの頃は、ある意味未明に没頭していたと思います。

卒論完成まで山あり谷ありの日々を送りましたが、ただ言えるのは、一生懸命やつて良かったということです。後期には本当に苦労しましたが、一生懸命できたのは、ご指導してくださった峯村先生や、一緒に頑張ってくれた友人たちがいてくれたからです。先生や友人、私を応援してくれた両親には感謝の気持ちでいっぱいです。そして、京女で、国文での学びは自分の財産になりました。京女で学ぶことができて本当に良かったと心から思います。

住吉大社と庶民信仰

——特に近世の庶民信仰を中心に——

関 藤 雅 子

〈卒業論文要旨〉

仏教民俗学研究の立場から、五来重氏は「元興寺極楽坊と中世庶民信仰」の論文において、庶民史を解明することが、歴史と信仰を明らかにすることにつながる、とされている。この五来氏の提言を受けて、卒業論文では現大阪市の南端、住吉区に鎮座する住吉大社を素材として採り上げることにした。住吉大社にみえる「庶民信仰」について検討し、大坂（阪）とその周辺の地域に暮らす人々の精神生活とその信仰の実態について検討したいと思う。

住吉信仰は古代から近世の時代において、多くの文学作品・文献史料に確認できる。多種多様な信仰が存在し、それぞれの信仰は重層的な形で存在しているのである。しかし、これらの資史料にみられる貴族や国家的見地からの信仰だけでなく、地域で暮らす人々の精神生活とその信仰を窺う内容も住吉大社には存在していたはずである。それらは近世の庶民信仰史料から、その一端を知ることができる。そこでこれらの諸史料について先行研究をまじえ、分析、検討した。

その結果、『神社仏閣願懸重宝記』や『神仏靈験記図会 二篇目録』（以下「二篇目録」と称す。）、『耽奇漫録』、『浪華の賑ひ』などに、近世期の人々の住吉大社への俗信的な信仰が確認できた。

『神社仏閣願懸重宝記』や「二篇目録」には、住吉大社に関係する項目があり、その内容をひとつずつ確認した。『摂津名所図会大成』や元禄期の住吉大社の社人であった梅園惟朝の記した『住吉松葉大記』などを参考史料として、内容の検討にあたった。なかでも、「二篇目録」は目録のみが残されており、詳細でない史料であったが、目録の内容を同時代の地誌等からその内容を推察することができるのである。

また、住吉大社の参道で売られたとされる「住吉土産」と呼ばれるものにも焦点をあてた。「土人形」や「花笠」などからは、参詣する人々が多く買い求めたとされる事実や、人々の暮らしと結びついた信仰が、「住吉土産」というひとつの形となつてあらわれていることが把握できるのである。

さらに江戸時代後期の『摂陽見聞筆拍子』には、住吉大社のどのような信仰と結びついたのかわからない伝承が記されている。このような史料も残されているのである。したがって住吉大社の庶民信仰については、不明な点が多く、その全貌は明らかになっていないとは言えない。また、今後の研究課題も多く残されている

ため、近世という時代だけでなく、さらに時代を遡った研究が必要である。

〔論文執筆体験記〕

卒業論文のテーマを決めるにあたって、なるべく身近なテーマにしたい、と考えていた。住吉大社は自宅からほど近く、幼いころから初詣や夏祭りを訪れていた場所でもあった。さらに、民俗学の授業から「庶民信仰」という概念を知り、住吉大社と庶民信仰のテーマで研究しようと思った。

住吉大社については、三回生の後期のゼミ発表から素材として採り上げていたため、そちらの研究もまじえつつ、庶民信仰という問題を掘り下げていくことにした。また、住吉大社には何度も訪れ、写真を撮るなどして、フィールドワークも行った。実際にその場所を訪れてわかることが多くあった。しかし、こちらの都合で実際に住吉大社の方にお話を伺うことができなかったことは、大変心残りである。

また、卒業論文執筆にあたって、先行研究を多く集めることも心掛けた。なるべく多くの先行研究にあたる必要があったため、論集や、京都女子大学国文学科の先生方の『シリーズ「文学と神社」①「住吉社と文学」』も参考にさせていただいた。さらに豊島先

生のお勧めで時間があるときに、読んだ論文の内容を自分なりにまとめて、ファイリングしていた。そうすると、あとから、その論文には何が問題として提起され、どのような史料が参考にされ、結論がどうなったのか、一目でわかるのである。

苦労したこととしては、卒業論文の研究内容は近世という時代には絞っていたものの、扱う内容が幅広くなってしまったため、限られたページ数に納められなかったことである。そのため、本文内容を削って注や補注にまわすところに、大変時間がかかった。また、添付資料として、略表や写真資料をつけるなどして、研究に用いたものをなるべくわかりやすく、論文中にまとめるところも、苦労した点であった。

さらに、四回生後半には、就職活動と論文作成との時間をうまく調整できなかったことも、大変苦労した点でもあった。気持ちの切り替えも大切なことであると思う。

印象に残っていることとしては、ゼミでの発表である。自身の研究内容の発表をすることで、考えがさらにまとまり、先生やゼミ生の質問によって、新たな発見もあった。さらに、他のゼミ生の発表でも、思いもよらぬところで、自分の研究内容との関わりが見つかることも多くあった。毎回の授業で様々なことを学ぶことができたと思う。

学生生活の集大成である卒業論文執筆を通して、先生のご指導を受けられたこと、一生懸命にひとつの研究テーマに集中して取り組むことができたことは、非常に貴重な経験であり、自分自身の糧になったと思う。

尾崎紅葉作品の記号の使用法

伊 達 歩 実

尾崎紅葉は明治初期に活躍した文豪である。彼は作品の内容だけでなく、文体にも注目して小説を執筆していた。特に、出世作となった「二人比丘尼色懺悔」は、雅俗折衷体でも言文一致体でもない、紅葉の言うところの「一風異様の文体」で書かれ、当時話題となった。その「二人比丘尼色懺悔」本文を見ると、台詞は二重パーレンで括られ、三点リーダーやダッシュといった記号が多用されている。明治初期において、このように様々な記号を多用している作家は少ない。紅葉が所属していた硯友社でも、記号の使用法は確定しておらず、作家、作品によりその使用法は様々である。

紅葉は自ら意識して記号を使用しており、作品によって用いる記号を変えながら小説を執筆していたものと思われる。紅葉の小説における記号の用法と、明治初期の記号の用法、硯友社社員

記号の用法を比較することで、紅葉の記号意識を明らかにできる。そして、紅葉の小説における記号の役割を明らかにすることで、彼の文体論に新しい見解を加えられるものと考え、本論を提起する。

第一章では、「二人比丘尼色懺悔」に見る紅葉の記号に対する意識について考察する。

「二人比丘尼色懺悔」は『新著百種』第一号に掲載された小説である。本論では、まず、同じ『新著百種』の第二号に掲載された「堀出し物」と、本文、序文を比較し、紅葉の文体意識と見た目の違いを示し、「二人比丘尼色懺悔」の見た目の特異性、明治初期の一般的な小説の外観を提示する。空白や記号が多用されている「二人比丘尼色懺悔」と、全く記号が使用されていない「堀出し物」とでは、双方の序文から考察するに「堀出し物」の方が当時一般的であったと考えられる。また、『新著百種』第二号に寄せられた「二人比丘尼色懺悔」に対する批評から紅葉の特異性を指摘し、紅葉の記号に対する改革を明らかにする。

次に、紅葉が執筆した記号に関する手引書である「文盲手引草」と「二人比丘尼色懺悔」本文とを比較し、紅葉の記号意識と小説における記号の使用法を明らかにする。紅葉は、小説を執筆していく中で、用法を修正したり付け加えたりしながら、記号の使用

法を確立させていったものと考えられる。

第二章では、明治二十年前後の記号の使われ方を、「二葉亭四迷、坪内逍遙の小説から考察する。

まず、紅葉と同時期に活躍していた二葉亭四迷の「浮雲」を取り上げ、その特徴を示す。特に、小説の外観と「浮雲」における記号の使用法を本文から考察し、記号に関しては、かぎかっこや三点リーダーなど、それぞれ記号の用法を明らかにする。

次に、坪内逍遙の作品を取り上げ、紅葉が文壇に登場する以前の記号の使われ方を提示する。まず、明治十八年に発表された『当世書生気質』と『妹と背鏡』を取り上げ、逍遙の明治初期の記号の使用法を探る。そして、明治二十二年に発表された「細君」を取り上げ、逍遙の記号に対する意識の変化を見る。『当世書生気質』『妹と背鏡』と「細君」を比較することで、記号の使用法の変化を見ることができると考える。

そして、紅葉の「二人比丘尼色懺悔」と二葉亭四迷、坪内逍遙の作品とを比較することで、明治二十年前後の記号の使用法に関する作家たちの共通認識と、紅葉独自の記号の使用法を明確にし、紅葉が踏襲した記号の用法と、創作した記号の用法を明らかにする。

第三章では、『我楽多文庫』に見られる紅葉の文体の出發を、

巖谷小波、山田美妙の作品と比較し考察する。

まず、三作品の本文を取り上げ、各作品の台詞の提示の際の記号や、改行の有無を示す。三作品の台詞の提示方法から、硯友社での台詞提示の際の共通点と相違点を明らかにする。

次に、三作品の記号の使用法を本文からそれぞれ確認する。三作品での用法の共通点と相違点を、特に紅葉が対抗心を持っている美妙と比較することで、紅葉の記号意識を明確にする。

第四章では、紅葉の記号の使用法の変遷を初期作品から晩年の作品まで、時代による変化、掲載媒体の違いによる差異を調査し、明らかにする。

第五章では、「金色夜叉」に見る紅葉の記号の使用法を考察する。まず、歌留多会の場面をあげ、「金色夜叉」での台詞の提示方法を確認する。次に、記号に関して、場面背景や登場人物の心情と照らし合わせて考察し、「金色夜叉」内における記号の使用法をまとめる。

初期作品で、様々な記号を使い分けていた紅葉は、「金色夜叉」に至るまでの小説の中で、自身の記号の使用法を確立させていき、他作家の記号の用法に影響を受けることで、「金色夜叉」に見られた、整理された記号の種類と用法になったものと思われる。紅葉は、明治二十年前後の、未だ記号の用法が曖昧な中で、新たな

記号の創作、記号の用法の定着に尽力した作家の一人であったと言える。本論では記号の用法のみに焦点を当てたため、紅葉の作品に多く見られる空白の効果について考察を述べることができなかった。今後、記号と空白についても言及していきたい。また、当時の文化的背景、政治的背景と文体の関わりを調査することで、明治期の小説を理解する手掛かりがより得られるのではないかと考える。

以上が論文要旨である。

私が修士論文を執筆するうえで悩まされたのは、偏に時間の有限さである。就職活動、教員採用試験対策を同時に行っていた私とはとにかく時間がなかった。これに関していえば、早めに論文執筆に取り掛かるしかないと思う。研究を進めていくと、読まなければならない資料が増える。論文には直接関係しなくとも、一読を求められる資料もある。それをどれだけ読み切れるかで、論文の良し悪しは変わってくると思われる。今後、卒業論文を執筆される皆さんには、その時間をなんとか捻出してもらいたい。

ただ、体を壊されては元も子もないので、体調管理には十分気を付け、いい論文を執筆してください。

優秀論文発表会を聞いて

四回生 五十嵐 千穂

卒業論文を制作するにあたって、まったく白紙の状態からでは取り掛かるには難しいと思い、先輩方の論文を参考にできればと考えて参加に至りました。論文の題目から私の専攻分野に関わるものは直接的にはありませんでしたが、制作過程や形式などは何かしら学べるものがあると思いました。

今回は近世分野の発表が多くありました。また時間の関係上、発表の持ち時間が定められていて、卒業論文或いは修了論文の詳細な内容にまでは及ばず、論点だけを抽出した形だったので、専門外の分野の発表は理解が困難な部分もありました。しかしその中で新たに発見できたことや共感し得たことがありました。近世の発表では、小説の作者の研究のみならず、作品中の時代背景と作者の理想社会像を関連させているところに感銘を受けました。そのように直線的にテーマについて考察するのではなく、多角的な視点で以て論を展開していく姿勢が重要であると思いました。多角的な視点の一環として先行論文の批判があります。先輩方の論文では、先行論文の意見に対して批判をする箇所の発見、その批判箇所が間違っているという証明などを明確に論じていて、私

もこのような論の展開を心掛けたと思います。また、自分の興味関心があるだけでなく、調査への意欲が湧く作品を見つけたという事も卒業論文のテーマ設定においてひとつのきっかけになることに気づきました。

これから卒業論文を書く人に向けてのアドバイスもいくつかありました。例えば最初の段階として資料収集が大事であるとおっしゃっていました。集めた資料の量には自負できるとおっしゃっている先輩もいるほどで、資料収集が卒業論文を書くにあたっていかに重要で大切であるかを改めて実感しました。他には先行論文を自分の言葉でまとめて理解を深めておくという作業も有効であるとおっしゃっていました。そのアドバイスを今後の卒業論文の制作や調査の中で生かしていきたいです。

今回の話でテーマ設定・資料収集・先行論文の批判とその根拠・最終的な持論という制作過程ほどの分野も共通であると実感しました。また締切日に余裕をもって取り掛かることも重要であるということが分かりました。予想以上に資料収集で時間がかかってしまう場合も考えられるので、早い段階から調査に取り掛かる必要性があると認識しました。それらを踏まえて今後の卒業論文制作に取り組んでいきたいと思いました。

春季公開講座（五月二十日）

春季公開講座に参加して

博士課程前期一回生 小 西 洋 子

日本には、言霊と呼ばれる信仰があり、古代からことばには霊力が宿ると信じられていた。今回の公開講座では、古代から現代まで様々な用例を紹介して頂き、主に忌詞、合字、書記方向の変更という側面からことばの呪性の実態を捉えることができた。これらの三つの側面について特に印象に残った例を、それぞれ簡単に挙げてみたいと思う。

まず、忌詞とは不吉な意味を連想させるため使用が避けられることばである。江戸時代の嫁取りの儀式の史料には「はなる」、「わかる」、「などは回避するべきことばとであると記されている。これは現代まで残る風習であり、例えば、今でも葬儀の際に「返す返す」などのような不幸が連想されることばを重ねて用いることは避けられる。

合字とは慶事の表現、凶事の表現阻止のためなど、まじないとして二字以上の漢字や仮名を一字で表記する文字のことである。身近な例では、龍安寺の蹲距に彫られている「吾唯足知」もその一つである。

書記方向の変更というのは、文字や文の記される方向が変更される現象のことである。多くは神仏へ祈願する際の願文に見られるが、和歌や歌謡にも見られる。例えば、『閑吟集』に「むらあやてこもひよこたま」という例がある。この文を逆さから読むと「又今宵も来でやあらむ」となる。このように書記方向を変更した場合、一種の暗号のようになる。実は、これは現在にも見られる現象である。現代の隠語の中にブージャ語と呼ばれるものがある。サンガラスのことを「グラサン」と言うことがその例であり、一種のことば遊びである。現代の隠語と神仏への祈願のために書方向を変えることとは、一見性格が異なるように見えるが、実は両者には共通性がある。どちらも自分と特定の相手との間で行われるということである。特定の人にしか知れないという所に仲間意識や優越感を味わうことができるのである。

ここまで、遠藤先生が紹介された用例を見てきたが、ことばに対する信仰の様相は、文字や音、意味、書記方法といったあらゆる面に現れていることが分かる。ことばとは何かを表現するための手段である。しかし、単に表現手段としての役割を担っているだけではなく、ことばの存在そのものに価値が見出されているのである。そして、それらは古典の世界だけではなく、現代にまで見られるのである。

今回の公開講座を通じて、ことばの信仰は、今でも身近なところに存在していることを知った。おそらく、受験生が試験前に「落ちる」とか「滑る」ということばを避けることもその一つであろう。古代から現代に至るまで、ことばの系譜を辿り、様々な側面を知ること、改めてことばの魅力に気が付くことができた。これを機会に身近なことばに関心を持ち、現在にも残る言霊信仰に注目していきたいと思う。

最後になりましたが、貴重なご講演ありがとうございました。

春の公開講座を受けて

三回生 丸 岡 奈 央

先日は暑い中、わざわざ京都女子大学にお越しいただきましてありがとうございます。ご講義の内容は、九十分という時間の長さを感じさせないほど濃く、大変勉強になりました。私はご講義を通じて言語遊戯と呪術性は密接に関わっていること、言語遊戯と呪術性の関連性も時代やものによって違いがあるということを知りました。今回の講義では忌詞、合字、書記方向の変更、いろは歌を例にご講義をなされていたので、その流れに沿って感想を述べさせていただきます。

まずは忌詞について。現在でも婚礼や葬式のマナーとして残っ

ていますが、その根底には言霊思想があります。言語遊戯における呪術との関係性は今でも私たち日本人の深層意識に刻まれているのだなと思いました。また忌詞はしばしばその語の音韻が別の忌むべき語の音韻を連想させるため、避けられることがあります。漢字そのものだけでなく音韻にも呪術的な意味が込められていることに改めて気づかされました。さらに諱の例からも分かるように、高貴な人と同じ音韻の言葉が、高貴な人と被ることで相手を貶めないようにするためにしばしば避けられたのだということを実感しました。

次に合字について。則天文字のような変わった文字を呪術に用いたことは、もちろん言語遊戯と呪術における関係性を表していますが、複数の漢字を一つに合体させる合字もまた言語遊戯と呪術の関係性を表していると思いました。

それから書記方向の変更について。例として挙げられたものは、どれもただの暗号文に見えます。しかし、そこには「神仏ならばこの文を読むことができ、私の気持ちを分かってくれるだろう」という祈りが込められています。他人に解読不可能にしているだけでなく、神仏にのみ自分の思いを共有しているところに言語遊戯と呪術の関係性があると思いました。また、近現代において仲間や業界内など特定のグループで使われる隠語が、書記方向の変

新入生歓迎行事 能楽鑑賞会（六月十八日）

呑まれる美

一回生 田北 真知子

能の発祥は室町時代。庶民の間で流行した娯楽「猿楽」が当時の將軍足利義満公に認められたことで、貴族向けの、文学作品を題材とした演目が出来あがった。これが現代まで脈々と受け継がれている。

「能は生きている。」

能楽師河村晴久さんの言葉である。観阿弥・世阿弥によって成り立ってから二十一世紀の現在に至るまで、能は人々の心を魅了し続けてきた。芸能には流行りがある。大衆の興味が薄ければ、その芸は泡沫の如く消えてしまう。しかし、能・狂言は違う。今なお楽師の方々が各地でご活躍されている事が、何よりの証拠である。

今年の新歓行事の番組は、着付の紹介、小鼓・大鼓体験、狂言「寝音曲」そして能「橋弁慶」であった。

着付の紹介でモデルをされていた松井美樹さんは、京都女子大学食物学科の先輩だった。「葵の上になれるので」という動機で、能楽部の部室のドアを叩いたのだそうだ。今回の紹介で着付けた

更と同じ系列であるということも非常に興味深かったです。今の隠語が仲間意識を強め優越感を与えるものだとするならば、古代使われていた書記方向の変更もまた、神仏との個人的な連携を強め身近に感じる効果があったのだらうと思いました。

そしていろは歌について。一般的には手習いの歌という認識があるいろは歌ですが、狂言犬山伏に見られるように呪言としての「面があつたことを初めて知りました。「をわか」を陀羅尼の「そわか」ともじり唱えていたということ。いろは歌を七文字区切りにし、末尾を読むと「咎なくて死す」となることなど、いろは歌の意味深なところが逆に呪言としての神秘性を深めたのだらうと思いました。

私は今回の講義を受けて、日本語の新たな側面を知ることができました。今回の講義で取り上げられたもの以外でも、言語遊戯と呪術の関係性が見られるのかどうかなど、自分でも考えてみたいと思います。

能衣装を見て、その憧れも理解できたように思う。何よりそのきらびやかさと美しさ。赤の西陣織に金糸で縫いとられた鳳凰は一足舞う度に煌いて表情を変えた。舞に使用していた扇は「青金」「赤金」という二種類の異なる色の金箔が使われており、手の中で揺れる度にまぶしいくらいにスポットライトを反射して輝いた。あれが本当の能楽堂で、舞台用の強いスポットライトだったら、もっと美しかっただろうに、と欲が出る程に魅力的な衣装だった。

小鼓・大鼓の体験では、楽師の方の説明、実演の後、希望者が各楽器一人ずつ舞台上がり、掛け声と共に鼓を叩かせて頂いていた。小鼓の面の皮は数十年も使える代物であるが、対して大鼓の皮は消耗品。直前まで炭火であぶって完全に乾燥させて使うため、十公演と保たないのだそうだ。そのためとても固く、素手で打つと手が腫れあがつてしまうという。能楽には譜面がない。そのため、楽師は掛け声で呼吸をあわせる。楽師の方々は、客席の私達にも打ち方を教授して下さったが、実際に鼓を打った二人は羨しい限りである。

狂言「寝音曲」は歌を謡わせようとする主とどうにか断りたい太郎冠者との応酬。この演目で謡われている「おもしろの花の都や」という歌は当時の流行り歌で、京の名所がうたわれている。実は能と狂言では歌の調子が異なるのだそうだ。

太郎冠者は謡いたくない為に主に条件を出すのだが、主はそれを難なくクリアしてしまう。その時の太郎冠者役茂山良暢さんの何とも言えない不服そうな顔と云い声と云い、可笑しくて声を上げて笑ってしまった。

能「橋弁慶」は五条の橋の上での弁慶と牛若丸の決闘の場面。シテである弁慶を引き立たせる為、牛若丸は子方。大きなたを振り回すシテ方の味方團さんは、子方の味方慧さんと並ぶとより一層大きく見え、身長二メートル近かったという逸話を持つ弁慶はびつたりだったように思う。

能は小道具、舞台装置をほとんど使わない。役者の舞と地謡の謡で観客のイメージを呼び起こす。あの時、舞台には確かに欄干が見えた。人の身体と声だけで景色を表し、場所を表すことができるというのは、能が持つ最大の魅力の一つだろう。

今回、初めて真近で能・狂言を観ることが出来て、今までも風雅な芸だと思っていたのだが、圧倒された。楽師は物語に観客を引きずりこんでいく。私はその巧みな技に、いとも簡単に吞まれてしまった。六五〇年人々を虜にしてきた芸能を真近で観ることが出来た、この貴重な体験は忘れられないだろう。

能楽を通して学んだこと

一回生 服部恭子

国文学会新入生歓迎行事の能楽鑑賞会に参加し、日本の伝統芸能を堪能することができた。私にとっては、初めての経験であったので、この行事は大変有意義なものとなった。

能楽といえば、お面をつけて舞う古典芸能といった印象が強く、これまでに興味を持ったことはないに等しいものだった。けれども、この能楽鑑賞会によって日本芸能に対する意識の持ち様が変わったと実感している。

この行事では、能楽の『橋弁慶』の上演だけでなく、狂言の舞や小鼓・大鼓の演奏体験、そして観客が見ることのできない舞台裏の着付けの様子などが紹介された。

能楽衣装の着付けは普段見ることのできないこともあり、興味深い番組の一つになった。衣装は、能楽の舞台にとって重要な役割を果たしており、演者の胸元から僅かに見える襲ねの色の組み合わせによって役柄を変えられることができる。衣装も一般的な着物と着付け方が異なり、舞いやすさを重視するものだった。

今回の鑑賞会では、狂言の舞台も味わうことができた。狂言は、能楽の舞台の合間に演じられる滑稽なセリフ劇である。能楽と同様、古典芸能だから堅苦しい内容かと想像していたのだが、初め

て狂言を鑑賞した私でも思わず声をあげて笑ってしまうほど、楽しい舞台であった。笑う、という演技を学生全員で体験したが、声の調子を変化させたりお腹の底から声を出したりと、簡単に思える振る舞いも私は難しく感じた。狂言では『寝音曲』が演じられ、とても面白い内容で会場からは笑い声が絶えないほどだった。時代を感じさせない、今を生きる私たちでも親しめる。古典芸能の新たな一面を垣間見ることができた。

最後に上演された能楽の『橋弁慶』は、鳥肌が立つほどの素晴らしい舞台であった。芯が通り、太く流れるように響き渡る謡は、観客から張り詰めた心持ちと演目への期待感を引き出す役目となっていた。シテの一つ一つの所作は力強さと優雅さを兼ね合わせており、舞台上に満ち満ちた気迫が自身の座る席にまで伝わってきた。弁慶と牛若丸のリズミカルな切りあい、迫力のある刀さばきからは荒々しさが感じられた。だが、ただ荒々しいだけでなく、細かい動きからは繊細な気遣いが感じられ、日本らしい美しさにも触れることができた。

能楽では、演目の説明は敢えて乏しいものにするという。これが観客一人ひとりの想像力を掻き立てる役目となり、観客の感じるままに「幽玄」を堪能してもらおうことにつながるのだ。このような精神が現代の能楽の中にも生き続けていることに感銘を受け

た。六百年前に愛された芸能、という考え方にとどまらず、現代にも親しまれ、未来でも愛され続ける古典芸能であるように、という思いが込められている。今を生きる能楽に触れることで感じる事ができた良い機会となった。

二〇一五年度 論文題目

修士論文

『ひきょう殿物語』における歌の存在について

— 甲類本と乙類本の比較 —

尾崎紅葉作品の記号の使用法

日本漢詩文における王子喬像について

— 上代から中古を中心に —

— 特徴から見る二六七番歌の寓意性 —

笠女郎における「人」— 女歌表現をめぐって —

万葉集における雨の表現について

— 二五・三・三五・四番歌を中心に —

万葉集の防人歌四三七二番歌について

酒の歌

万葉集における四段活用「忘る」について

— 頻度表現との関わりから —

中古

火影に見し姿— 軒端荻から寢覚の上へ —

『源氏物語』夕顔の死— 八月十五夜の日付設定 —

「雨夜の品定め」中の品と上の品の男の理想

— 「まめ」と「すき」 —

漢籍引用からみる『枕草子』の人間関係

— 清少納言と藤原行成 —

爪はじきによる中納言の人物造形

— 『落窪物語』論 —

源氏の宮の人物造形

— 朝顔の姫宮を中心にした再検討 —

卒業論文

上代

大伴坂上郎女の母の歌

萬葉集に於ける用字「森」の訓

万葉の挽歌に見る「雲」の表現

家持の月の歌

志貴皇子の和歌

金井咲樹

野田香澄

森下真帆

森島優希

山本真理子

井上真理子

大木寧々

小川千絵

杉浦麻実

辻真幸

筒井優希

『とりかへばや物語』の四の君

—密通を中心とした彼女の存在意義—

林 佳苗

『鼠の草子』の変遷—姫君の描かれ方を中心に—

浅井千尋

『うつほ物語』における風と琴の関わり

三宅 梓

—殺生石伝説を持たない伝本を中心に—

池田実紀

『源氏物語』葵の巻にみる喪服「藤衣」

山田 織穂

『嵯峨物語』脱悲劇論

岩下桃子

—和歌の「藤」における使い分けについて—

東 美沙

『玉水物語』についての考察

浦田 亜由美

『日本霊異記』における狐のイメージ

石 鞍風花

—異本『紅葉合』との比較から—

越智 繭未

平安詩歌における紅梅について

練 谷 栞

狂言『柿山伏』のもつユーモア

桐畑 美里

常夏の女の人物造形と白居易

小 西 洋子

近江余呉湖の羽衣伝説の時代による変遷と意味

小林 真由

大江匡衡と題壁詩

西 村 郁美

—羽衣を取る男を中心に—

小 林 真由

古代・中世文学の白詩受容

野 田 有希

『大日本国法華経験記』一二九話考

柴 田 祐美

—「香炉峯下、新下山居、草堂初成、遇題東壁、五首」重題其の三を中心に—

野 田 有希

—女の執念と恐ろしさ—

立 部 早智子

中島敦『山月記』の作風について

野 田 有希

『狐媚記』第二話の創作性—七条河原を中心に—

柴 田 祐美

—中国の古典文学との関係を中心に—

野 田 有希

『簞篋抄』に描かれた安倍晴明像

立 部 早智子

白居易の江州左遷時代における「閑適詩」と「感傷詩」

濱 田 悠希

『梵天国』の姫君に見る中世の女性像

田 中 寛子

『太平記』における邯鄲譚

原 田 沙季

説話中の冥官尊像についての一考察

辻 野 奈津実

『太平記』における邯鄲譚

原 田 沙季

『唐物語』第二話の特徴

東 郷 綾

—「琵琶行」との比較を中心に—

原 田 沙季

『今昔物語集』における地藏信仰

遠 山 ひかる

—『讃州志度道場縁起』を中心に—

原 田 沙季

—地藏説話群に見られる工夫—

遠 山 ひかる

謡曲『海人』に関する一考察

泉 川 昌代

『梵天国』の成立背景

豊 田 理奈

—『讃州志度道場縁起』を中心に—

泉 川 昌代

『梵天国』の成立背景

豊 田 理奈

—成相寺との関係を踏まえて—

『十二類絵巻』の主題について

—狸と鶉と天狗の関係を中心に—

『百人一首改観抄』の真価

—付加された引用歌の役割—

『しのびね物語』の姫君像

理の人為兼—『為兼卿和歌抄』から見る—

『沙石集』における浄土門批判

鬼と清水の関係

—『天正狂言本』収載「野中のし水」考—

『百人一首』撰歌基準考

近 世

天橋立の和歌について

『仁勢物語』考

『近江八景和歌』考

有馬節考—藤と松に関わって—

「もじり百人一首」考

—『戯劇百人一首闇夜燐』を中心に—

平賀源内『風流志道軒伝』における海外と日本

直田 祐加

中村 萌菜

濱 中 彩 巴

半田 千 晶

松 尾 直 子

米 田 真 知 子

若 原 玲 奈

上 島 彩 郁

薄 田 葵

小 嶋 美 紅

坪 野 亜 紀

西 村 つ む ぎ

藤 永 祐 佳

『本朝桜陰比事』卷三の五「念仏売りてかねの声」考

『丹波与作待夜のこむろぶし』論

—滋野井の葛藤とその救済について—

『心中宵庚申』論—親子関係の描かれ方—

『心中天の網島』考—主人公治兵衛について—

『江戸生艶気権焼』における遊女・浮名の人物像 菊 池 彩 織

—京伝の遊女観を検討しながら—

『平家女護島』考—千鳥と東屋について—

『心学早染草』考

—悪魂が読者に与える「笑い」について—

『心中天の網島』考

—「阿呆」役三五郎の効果について—

『心中重井筒』における「女同士」の独自性

—時代物との比較を通して—

『大経師昔暦』論—結末に向けた近松の工夫—

赤本『桃太郎昔語』論

—食べ物における当世化からみえる魅力—

『死霊解脱物語聞書』考

—「助」の描き方について—

吉 川 実 莉
荒 井 阿 紀 子

石 田 萌 美

上 出 あ かね

興 杏 奈
竹 森 柚 美

田 中 優 企

寺 村 泉 季

出 水 雅 子

鳥 居 奈 央

中 村 実 夢

『牛若千人切』における牛王姫の独自性について 二宮 夏海
— 『牛王の姫』及び同年代の作品との比較を中心に—

『薩摩歌』論

福田 愛里菜

— おまんの人物像とその独自性について—

『卯月紅葉』論

本郷 由香理

— 与兵衛の描かれ方と結末について—

『好色五人女』論

宮地 由季

— 巻五におけるおまんの恋の描かれ方の独自性—

『万の文反古』巻三の三「代筆は浮世の闇」における

鳥の意味について

宮田 香

— 因果応報譚との関わりを中心に—

赤本『鼠のよめ入り』論— 娯楽性の追究—

若宮 奈津美

『傾城阿波の鳴門』における夕霧の女性像

割石 瑠衣

— 他作品の遊女との比較を通して—

近 代

岡本かの子『川』考察

浅間 はるか

— 直助はどこへ行ったか、川という世界—

樋口一葉『十三夜』論

今枝 萌

— お閨と〈理想の女性〉の相違—

太宰治「皮膚と心」論

小川 真穂

泉鏡花「天守物語」論— 封建制度と富姫—

桶田 茉里

安部公房「砂の女」論

高姓 奈里

泉鏡花「縷紅新草」論

小西 祐美

宮沢賢治「連れて行かれたダアリヤ」における

小島 永奈

〈火〉の意味について

濟木 麻有

泉鏡花「外科室」論

酒井 遥

— 島村抱月の同時代批評を手掛かりに—

梶井基次郎「雪後」論

坂口 結有

— 〈女の腿の夢〉と〈切符売場の夢〉を中心に—

徳富蘆花「不如帰」論

妹尾 咲紀子

芥川龍之介と「鼻」に関する研究

富永 未来

川端康成の少女小説と代作者について

名倉 真依子

— 「歌劇学校」を中心に—

清水紫琴「こわれ指環」執筆意図

平田 真希

— 「私」と「モニカ」の差異を中心に—

小川未明「牛女」についての考察

藤本 あすか

— 母性に着目して—

森茉莉「恋人たちの森」論

— 若さと美しさについて—

童話「貝の火」考察「ホモイはなぜ失明したのか」	松本有希子	星新一のショート・ショート研究	小和田実里
星新一による「人間の再検討」	三嶋真理子	「登場人物の名前と落ちの関係について」	
―葉に焦点を当てて―		「千鳥」における藤さんについて	篠崎葵
藤沢周平短編「龍を見た男」論	茂木円香	渡辺温「アンドロギュノスの裔」考	杉本志帆
―火柱の出現の意図―		小川未明の死生観論	鈴木那月
壺井栄「克子」ものに見る作者の愛情	森真悠	―「金の輪」以降の関連作品への影響について―	瀬麻衣子
岡本かの子「家霊」論	森木慧	「妊娠カレンダー」における異世界の正体	園夏美
―くめ子が抱く「矛盾」と「諦め」―		太宰治「饗応夫人」論	
小川未明「港に着いた黒んぼ」論	安田知世	芥川龍之介「影」論―「二つの手紙」と比較して―	西村聡子
―〈良心〉から成る童話―		内田百閒に於ける女の存在	福森聡子
新美南吉の「狐」作品を読む	山田羽衣	太宰治「水仙」における僕の天才観	前坂詩織
―作品に描かれた母への思い―		―忠貞卿に着目して―	
尾崎翠「第七官界彷徨」論	吉田育子	坂口安吾「黒谷村」論	松岡菜津
―〈真〉なるものを求める姿勢―		室生犀星「蜜のあはれ」論	宮地由美
梶井基次郎「ある崖上の感情」論	荒川緑	―境界のあいまいさに着目して―	
―生島と石田の関係性を中心に―			
梶井基次郎「Kの昇天―或はKの溺死」論	伊名岡美帆		
―「私」の影に対する意識について―			
江戸川乱歩「双生児」論	大谷桃子	滋賀県湖東地方の方言について	澤田天音
		―中学生へのアンケートをもとに―	
岸田國士「古い玩珉」にみられる革新と実践	小高知子	外来語の使用状況から表記の問題まで	村岸繭

国語学

—学内でのアンケートをもとに—

文学作品からみる京ことば—助動詞を中心に—

福岡県筑後地方の方言について

—若年層の方言の使用状況と方言意識—

丹波方言の現状

—高校生へのアンケートをもとに—

愛媛県宇和方言について

—若年層へのアンケート調査をもとに—

愛媛県四国中央市の方言の現状

—高校生へのアンケートをもとに—

言葉の誤用について

—学内アンケートを中心に—

岡山市方言の研究—使用状況と意識調査—

現代女性の言葉遣いについて

—言葉の男女差に関する学内アンケートをもとに—

明治期小説の「シロテン（〆）」の機能

類義語「ツカル」「ヒタル」の意味用法の記述的研究

教科「国文学史」の目指したもの

—明治後期の教科書を例として—

富山弁の疑問の終助詞について

「いとど」と「いよいよ」の意味用法のちがいについて

グリム童話の翻訳の仕方 二題

接尾辞「—み」の上接語の性格について

「うるさい・やかましい・騒がしい」の意味分析

方言の使い分けとコミュニケーション

—若い年代の方言話者へのアンケート調査による分析—

国語辞典の見出し語

—『三省堂国語辞典』と『新明解国語辞典』—

福岡県筑豊地区の方言の境界線はどこにあるのか

—アンケート調査の結果をもとに—

認識論的にみた「和泉往来」の漢字

社説にみられるカタカナ語・略語

—アンケートによる京女生の理解度—

配慮表現として使用される「ちよっと」について

国際的観光都市京都の言語景観

—京都市内を走る鉄道停車駅構内にみられる掲示板の使用言語比較による—

木下太太郎の詩語彙

—計量国語学から導く『夕暮』—

大澤 奈央

加古 千晶

金子 奈月

岸田 美緒

高増 帆南

谷平 望

豊田 優希

永井 早紀

平野 明日香

廣島 友希

邊見 奈美子

望月 春香

山下 久美

民俗学

摂津国島下郡の村落と雨乞伝承

大塚 恭子

近江の庶民信仰の研究

木下 妥女

— 日牟礼の左義長祭を中心に —

竹生島の女人結界

木村 真奈

— 弁才天信仰と『竹生島』を中心に —

信貴山信仰について — 近世庶民を中心に —

久目 なるみ

『長谷雄草子』の鬼と中世の死生観

近藤 真実子

— 浄蔵の蘇生術を中心に —

住吉大社と庶民信仰 — 特に近世の住吉信仰を中心に —

関藤 雅子

徳島県下の地神祭と人形芝居

濱尾 泉

葛葉稻荷神社と庶民信仰

平田 瑞希

— 「信太妻物語」を中心に —

中世前期の天狗説話について

山田 真穂

— 「生きながら天狗」になるとは —

御霊信仰と川祭 — 播磨地域を中心に —

輪島 繭理

『女子大國文』 投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたもので可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括弧で記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかにを行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

局まで連絡すること。

六、(投稿先)

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、(投稿論文の採否)

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、(校正)

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、(本誌・抜き刷りの贈呈)

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務

十、(掲載論文の著作権及び電子媒体による公開)

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、(規定の改正)

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

江富範子・坂本信道・滝川幸司・豊島修・中前正志・山崎
ゆみ

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読を報告、
審議の結果、二点が掲載となりました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(宮崎・山中)